

「イサク奉献」

2011・11・27 (説教11481405)

旧約聖書の中で「イサクの奉献」の記事ほど私たちの魂を震撼させ困惑させるものはないのではないのでしょうか。ある日のこと、主なる神はアブラハムに、彼の愛する独子イサクを「燔祭」(焼き尽くす献げもの)として献げよとお命じになるのです。聴き違えなどではありません。生命より大切なわが子を主なる神は「献げもの」として求めたもうたのです。それでアブラハムは神に示された「モリヤの地」にイサクと共に上って行き、そこで剣を執ってわが子に手をかけんとした瞬間、主なる神はアブラハムをお止めになり「あなたの子、あなたのひとり子をさえ、わたしのために惜しまないので、あなたが神を恐れる者であることを知った」(12節)と言われた。イサクの生命は救われ、神はイサクの身代わりに「身代わりの山羊」(スケープ・ゴート)をお備えになったという物語です。

そこで、この「イサクの奉献」の物語は筋書きとしては単純なものですけれども、私たちがどうしてもここに難しさを感じるのは、主なる神がアブラハムに独子イサクを燔祭(焼き尽くす献げもの)として「献げよ」と命じたもうた、その神の真意がわからないという一点に尽きるのです。神は「愛の神」ではないか云々などという人間本位の甘えた理解などは問題外です。そのような甘えた議論の入りこむ余地なき厳粛さをもって今朝の御言葉はアブラハムとイサクの親子に、そして私たち一人びとりに与えられているのです。

元をただすなら、アブラハムは神によって「諸国民の父」「信仰の父」となるべく祝福を受けたのです。満天の星空を示され「汝の子孫もまたかくのごとくなるべし」と約束されたのです。そして長いあいだ子が与えられなかった妻サラとの間に老年にしてやっと与えられた一粒種がイサクでした。その大切な独子イサクをこともあろうに主なる神は「燔祭」として献げよとお命じになる。矛盾と言えばそれほど大きな矛盾はありません。だから宗教改革者ルターはこう語りました「アブラハムは度を失った。彼は息子を失うばかりではない。神までが嘘つきに思えたのである。神は『イサクによって汝に子孫が与えられたり』と言われた。しかし今度は『そのイサクを汝の手にて殺すべし』と言われるのだ。そんな残酷な矛盾する神を、誰が憎まざらぬだろうか」。

私たちの人生にも、神が「残酷な矛盾する神」に思えて仕方がない時があるのではないのでしょうか。ある禅の老師に「縁起が良い言葉を書いて下さい」と揮毫を依頼した人がいました。頼まれた老師は筆を執ると「親死に、子死に、孫死ぬ」と書きました。頼んだ人がさすがに怒りました「縁起が悪すぎる」と言うのです。しかし禅の老師が申しますには「それは違う。最初に親が死に、次に子が死に、最後に孫が死ぬ。

これほど縁起の良いことはない。この順序が逆になることこそ縁起が悪いことなのだ。その人は「なるほどその道理だ」と納得してありがたくその揮毫を頂戴したということです。しかし親に先立って子が死に、時には孫が先立つことさえ実際に起こるのが私たちの世界(人生)なのではないでしょうか。親にとって子を失うことは自分を失う以上の悲しみです。アブラハムがイサクをどんなに愛していたか主なる神は良くご存じであられたはずです。それなら神はアブラハムに対して、あなたにとって“絶対にかげがえのないもの”を献げるようにお命じになったのです。アブラハムは信仰の人ですから、わが子イサク以外のものだったら喜んですぐに献げたことでしょう。しかしイサクだけは違うのです。イサクだけは別なのです。それは「献げられるべきもの」ではないはず。決して死んではならぬ大切なわが子です。それを主なる神は「あなたの手で殺して献げよ」とお命じになる。これが「残酷で矛盾する神」でないとなれば何がそうなのでしょう。

しかも、私たちはこの「イサク奉献物語」を読むとき、イサクの年齢を年端もゆかぬ幼児であったかのように考えますがそうではありません。もともとのヘブライ語の言葉から見てもイサクはこのとき 16 歳以上の青年でした。ですからイサク自身も自分の意思で父アブラハムと共に「モリヤの地」までの辛い道程を歩んだのです。ベエルシバからモリヤの地（今日のエルサレム）まで直線距離で約 80 キロ、歩いて 3 日間の旅路です。この旅路のクライマックス、いよいよモリヤの山に登ろうとするところでイサクは父アブラハムに「父よ、火とたきぎはありますが、燔祭の小羊はどこにありますか」と訊ねます。これに対してアブラハムは「子よ、神みずから燔祭の小羊を供えてくださるであろう」と答えています。このこととても大切です。ここでアブラハムは「神みずから…備えてくださる」と答えています。この「備えてくださる」と訳された元々の言葉はラテン語では“プロヴィデレ”という言葉です。英語のプロヴィデンス（摂理）あるいは「備える」という意味の“プロヴァイド”の語源になった言葉です。本来の意味は「あらかじめ見る」ということです。もちろん本質的には私たち人間が物事を「あらかじめ見る」ことなどできません。そうではなく、私たちのために「あらかじめ見ておられるかた」すなわち真の神に自分の存在と人生行路の全てを委ねること、それが“摂理（プロヴィデンス）に生きる信仰”です。ですから「摂理」は「運命」とは正反対のものです。「運命」とは機械的な冷たい力が私たちを支配しているという考えですが、「摂理」とはそうした冷たい力から私たちを解放し、私たちを限りなく愛し、共にいて下さる神の御手が私たちをいつも守り導いて下さるということです。それが「摂理」を信じることです。

まさに父アブラハムとイサクは、この「神の摂理」を信じる者としてモリヤの山に登ってゆきます。つまりこのときイサクは自分を「燔祭の小羊」として献げる覚悟をしています。だから 16 歳の青年イサクは律法に従って縄で縛られ父アブラハムに剣で殺されようとするのを何の抵抗もせず黙って身を任せるのです。新約聖書のヘブル書 11 章 1 節に「信仰とは、望んでいる事がらを確信し、まだ見ていない事実を確認することである」とあります。信仰生活の本質は「神の摂理の御手」に自分の人生行

路の全てを委ねて生きることです。そしてそれは私たちが人生において最も大切なものを「見る」生きかたなのです。ではその“人生において最も大切なもの”とは何であるか。それをヘブル書は「望んでいる事からの確信、まだ見ていない事実の確認」と教えているのです。逆に言うなら、これがない人生は「モリヤの山」に登ることのできない人生なのです。安閑諾々として小康に甘んずる人生です。生と死の順序の逆転だけで崩れてしまう人生です。アブラハムもイサクも、まだ神が備えていて下さる13節の「一頭の雄羊」を見てはいません。見てはいないけれども、しかし彼らは既に信仰によって「神が備えたもう」御子イエス・キリストを見ています。信じています。主なる神ご自身が彼らのために「身代わりの山羊」なるキリストを備えて下さることを信じつつモリヤの山に登るのです。神は「あらかじめ全てを見て」おられます。言い換えるなら摂理の信仰とは、今は全く見えないけれども、神が必ず私たちの人生に祝福と生命を備えていて下さることを「確信し確認する」ことです。さらに言うなら(それこそヘブル書が明らかにしていることですが)神の御子イエス・キリストによる全き罪の贖いと赦しを「確信し確認する」ことなのです。

アブラハムはわが子イサクに「子よ、神みずから燔祭の小羊を供えてくださるであろう」と申しました。まだ彼が見ていなかったその「事実」は今朝の13節において明らかになります。「イサクに手をかけてはならない」という神の御声を聴いたアブラハムが「目をあげて見ると、うしろに、角をやぶに掛けている一頭の雄羊がいた。アブラハムは行ってその雄羊を捕え、それをその子のかわりに燔祭としてささげた」とあることです。次の14節にはこの出来事のゆえに今でも人々はその場所を「アドナイ・エレ」(主の山に備えあり)と呼ぶとあります。今日のエルサレムのシオンの丘の中心にあたる場所です。私たちの教会を昔から「真のエルサレム」と呼びました。その意味はまさに主なる神が私たち測り知れない罪人をご自身の御子イエス・キリストの十字架の贖いによって、この「身代わりの小羊」の死と葬りのゆえに、ただ恵みによって呼び集め限りない永遠の生命に与る群れとして下さったからです。ここに集まる者の数は決して多くはないかもしれない。しかし私たちは全葉山、全湘南地方、否、全日本と全世界を代表してこのキリストのみが唯一のかしらでありたもう「主の家」に連ならしめられているのです。

主なる神はまさに剣をもってイサクを殺そうとするアブラハムに「わらべに手をかけてはならない。また何も彼にしてはならない」とお命じになり、そこに“身代わりの雄羊”を備えて下さいました。しかし私たちの目を転じて十字架の出来事を見ると、私たちはそこでこそ真に言葉を失い立ち尽くすばかりなのです。主なる神は最愛の独子イエス・キリストを、私たち罪人のかしらなる者の「救い」のために呪いの十字架にお献げ下さいました。しかしそこには“身代わりの雄羊”(スケープ・ゴート)はなかったのです。身代わりの雄羊はいなかったのです。そこに「最愛のあなたの子を殺してはならない」という神の御声は響かなかったのです。キリストご自身が唯一の贖いの小羊であられたのです。まさに永遠の神の永遠の御子の十字架の死のみが私たちに真の生命を与えて下さった。決して贖われえない私たちの罪を贖うために御子

イエス・キリストみずから決然として「モリヤの山」(ゴルゴタの丘)に十字架を背負って上って下さり、そこで私たち全ての者のために永遠の滅びを引き受け、信ずる全ての者を罪から贖い出して下さったのです。

それゆえ私たちは今朝の御言葉によって、アブラハム・イサク父子と共に「見る」者とされています。何をでしょうか？。神が私たちのために世にお遣わしになった独子イエス・キリストの十字架の恵みをです。もちろんアブラハムの時代にまだキリストという言葉は現れません。しかし既にアブラハムはわが子イサクを燔祭に、罪の贖いのためにお求めになる主なる神の厳粛な御命令に従わんとしたことにおいて、この世界に対する神の愛の真実がそこにあること、すなわちご自身の最愛の御子イエスを十字架に献げてまでも私たちを救わんとしたもう神の愛を「見る者とされた」のです。森有正は「このときアブラハムは老人になった」と語っています。それは「真に神の恵みを知る者になった」という意味です。私たちの信仰もまたこの教会のかしらなるキリストのみを見上げ告白することにおいてこそ、真に老成した信仰になるのです。ルターはあの宗教改革の厳しい闘いの中で何度もこの箇所を説教しました。ある説教の中でルターはこう語っています。「父親は剣を振り上げた。青年は少しも動じなかった。ふたり共に主のみを見上げていたからである。そのとき天使が彼に呼びかけた。アブラハム、アブラハム、…神の峻厳さが我々の死の刹那においてさえ、どんなに力強く我々を贖い支えるかを忘れてはならない。我々は言う『生命の中でわれわれは死ぬ』と。そうではないのだ。神はお答えになる。『死の中にさえ尽きぬ生命がある』。『死に打ち勝つ唯一の生命、それはわれらの主イエス・キリストである』と」。

「摂理の信仰」は独子をも与えたもうた神の真実に寄り頼む信仰です。神がすべてを見通され、いつも私たちに最も必要なものを備え、私たちを祝福し生命を与えて下さるのです。だからこそ私たちはいついかなる時にも、涙にくれる時にも、身の置き場のない苦しみの中にも、はっきりと目を拭って、毅然として主のみを「見て」生きる者とされているのです。どのような現実の中にあっても、なお見えざるもの(神の摂理)が見える世界をご支配したもうことを信じて、希望を持って生きる者とされているのです。そこに私たちキリスト者の日々の生活の原動力があるのです。